
例えば一本の筆があって

ゆき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

例えば一本の筆があつて

【Nコード】

N0823K

【作者名】

ゆき

【あらすじ】

何か一つ、その人にとって『それさえあれば生きていける』というもの。

それに縋り、頼って、生きていく。

彼女にとっては『書くことが生きること』です。

（前書き）

何か一つ、それだけが生きた証。

そんなものを持つて、幸福なのか、不幸なのか。

万年筆は答えません。長持ちして、書くために使われ続けて。

万年の名にふさわしいほど壊れにくくても、彼はまだ、ただの道具。

「逃げる！」

叫んでいた。

……くそう。

俺はここで終わりか。

少女は一度振り向いて、けれど、意を決して走り出した様だ。肩から下がった鞆はとても重たそうに見える。背中が木の陰に隠れて見えなくなる。

「はあ……」

安心からか、別の感情からか、息を吐く。

森の中、ため息一つで身が沈む。

腐りかけた落ち葉のベッド。

体重を受けて落ちる。

「いてえなあ」

体中。痛みがある。脚には筋肉の痛み、肩には傷の痛み。

銃創。弾が小さく致命傷と呼べる傷はないのに、積み重なって命が折れそうだ。

死——死ぬのか。と、森の上細い月を見て思う。

自分の行いは正しかったのだろうか？

疑問。けれど、逃がした少女を思って疑問に答えをだす。

そして、幼い頃に言われた事は慰めだったと知る。

『正しいことをする人は、神様が見ていてくれて幸せになれる』と、それは慰めでしかなかったのだ。

——ああ、でも、これも、悪く、ない……。

こういうシーンは煙草でも吸っている方が似合うのだろうか、と思いつきながら意識が闇に呑み込まれていった。

十年前。出版業界で伝説になった一連の本があった。

『ある旅人の物語』という極めてシンプルなタイトル。

文体に革新的なスタイルがあるわけでもなければ、人を酔わせるような蠱惑的な文体であった訳でもない、いわゆる、識者の眉を顰めさせるようないかかわしい内容でもなければ、社会の裏側を克明に記したノンフィクションでもない。

表装に特別な仕掛けがあるわけでも無ければ、値段の高低が標準から外れていたというわけでもない。

長さは最終刊までで原稿用紙に換算して四千枚分ほど。

それでも、長さで話題になった訳ではない。

有名な作家の自信作でもなければ、有名な監督が映画にしたわけでもない。

内容は、旅人が歩いて世界を旅するというお話。綺麗な物を見て感動し、いい人に出会って喜び合い、悪い奴に出会って憤慨し、危険を乗り越えて冷や汗を流す。

空が綺麗と感動し。

海が綺麗と感動し。

星が綺麗と感動する。

——それだけの話。

そこはホテルの一室だった。

ただ、何もない。ベッドも鏡もテレビもチェストボードもない。あるのは、カビの匂いのするマットレスと固まって動きを止めた絨毯と机が一つ。

窓があるべき場所には分厚い鉄の板が張られていた。

そこはホテルの一室であつた、と言っだけの空間だった。

少女が一人。マットレスに身を預けている。

明かりは天井にはめ込まれている物だけで、それは昼も夜もなく部屋の中を照らしている。部屋の中に時間を示す物はなにも無い。

眠っている——訳ではない。死んでいる、訳でもない。

だが、そのどちらかに振り分けるのだとすれば、死んでいる、と言った方が近いのではないだろうか。

言葉を選んで表現すると、彼女は『殺している』。

白いワンピース——ただそれだけの服装で、彼女は『殺している』

息を殺していて、感情を殺していて、心を殺している。

は、と時々、殺しきれなかった吐息が部屋に響く。

部屋の中の音はただ、それだけ。

苦しい、とか、哀しい、とか。そういう感情はとうに無い。

苦い味が心に広がるとすれば、それは、そういった単体の感情ではなく、絶望という現象。

現実と夢と未来と希望と、絶望を殺す。

彼女は一日ごとに心の中に湧いてくるそれらを殺し続けた。

痛いのに慣れた、気持ちの悪さには慣れない。
慣れてしまえば自分の形を失いそう。

食べ物はいつも空腹になる頃に届けられる。

体の調子は悪くない。そうでなければ困る者が居るからだろう。
嚴重に管理されている。
生きている？——生かされている。

そこは、かつて希望の地とも呼ばれた場所。
砂漠の広がりの終端。砂漠と森の境界線に拓かれた余り大きいと
は言えない街。

ホテルの窓、オーシャンビューではなく、デザートビューが見ら
れたはずの窓は全て厚く封じられている。

砂漠は——越えられない。
砂漠を利用することはできない。
故にその街は、希望の地から商品価値のない土地へと成り下がっ
た。

交通的にも孤立している。商業的に意味のある街同士を結ぶ動線
はこの街から遠い。誰も好きこのんで、そんな場所には行かない。
だけ。

『誰も来ない』ということを利用したい奴らもいる。

——アウトロー、法の外、無法者達。

住むにはリスクが高い環境だから、隠れるには最適。
希望の地、と呼ばれていた頃に建てられたホテルは今では『バン
クス』と呼ばれていた。

各部屋を利用した貸金庫だ。

預けられる物は色々である。何かから隠れたい者が自分を預けたり、隠しておきたい物を預けたり——人身売買の途中一時保管に利用したりもする。

女衞もいれば、規約違反だが『バンクス』で客を取らせる者もある。

カビの匂いのするマットレスと固まって動きを止めた絨毯と机が一つ。

だが、この部屋。机の上に紙があつた、それも大量の紙。部屋の空気に相応しくないA4サイズの上質紙。印刷用の紙のようだ。それが積まれている。

今は五百枚一束が三つ。

机の近く、ゴミ箱があつて、周囲には紙が散らばっている。丸められた紙。

机の上の紙はそれだけではない。

教科書。近くの街、大きな商業都市の最上級の学校、金持ちしか行けない様な学校の教科書が一揃い、そして、ホテルらしく机の中に入っていたのであろう聖書が一冊。

空気が揺れる。

少女は殺す事を止めてマットから起き上がった。

ふらふらと、何処かおぼつかない足取りで机に向かう。

鞆は無い。持って行かれた。

教科書は、彼女が攫われた時に持っていた物だ。

他の持ち物と言えば……。

彼女はそれを手に取った。

残された最後の絆、ぼろぼろになったそれは。

——父親が大切にしていた万年筆。

・

彼女は殺していた。

全てを殺していた。

——殺すものは、反作用を受ける。業の重み。

彼女は死ぬべきだった。

いや、死ぬはずだった。

でも、生きている。

なぜなら、彼女は殺すと同時に生み続けていたからだ。

世界を、夢を、希望を、未来を。

うつつのなかで彼女にできたのは、思うことだった。

想像力の翼、それだけは鉄の壁でも止められない。

絶望しながら空を見た。

絶望しながら海を見た。

絶望しながら星を見た。

だから、彼女は旅をした。

共行きは父の万年筆だった。

最初の百枚は隠れて書いた。

健康管理に有用そうだと認められ、紙を貰えるようになった。
インクも貰えるようになった。

万年筆は高級なものだったが、見た目の保存状態が悪いので没収されなかった。

彼女は殺して殺して殺し続けた。

それでも浮いてくる希望を夢を紙に写した。

切り取って捨てていくように。——それだけをわけて溜めておくように。

希望を願い、夢を乞うて、けれど、世界を呪う様に書き続けた。

そうすることで何もかもを無くしていくように。

この部屋に入ってから何百度目かの食事の後、彼女の部屋には客が居た。

その客は若い。けれど、こんなところに居るような人間はろくな奴じゃない。

客はそれこそ『客』として、この部屋に来ただけけれど。彼女をマットに放ったままで、彼女の文章を読んでいた。読み続けていた。

何百度目とプラス数回の食事が終わった。

若い客は何度も延長をコールして、何度も食事を共にした。

その間、若い客は彼女と目を合わせていない。

何百度目とプラス十数回の食事が終わって、彼は立ち上がった。おもむろに、持ってきた鞆をひっくりがえした。中からは大量の、プラスチックや樹脂の玩具。

普通のおもちゃ屋には無いタイプの玩具だ。
そして、その玩具を――脚ではらいのけた。
一度、鞆を大きく広げ中の大きさを確かめると、彼女に向けて手を伸ばした。

誘うように――。

逃げた。

勿論簡単に逃げられる訳もない。

無法の街で貸金庫を営むなど、それ相応の裏付けがあるから出来ることだ。そして、こんな街で裏付けなど、一つの意味しか持たない、それは――『躊躇せずに報復すること』。

そして、顔役に刃向かうと言うことは、組織を相手にすることではない。
街一つを相手にするということだ。

逃げ切れる訳もなく。隠れた森の中で、男は死んだ。

男が死んだ半年ほど後、その一連の作品は出版された。

森で死んだ男、彼に捧ぐと書かれた前文。

四千枚の紙に書かれた物語は完結していない。

最終刊の後書きに書かれていた。

この物語は遺書であつたと。

ただ、書き続けることで生きることをごに許していたのだと。

死ぬために書く。死ぬまで書く。
終われば死ぬ。

それは命を刻みながら書いた文章だ。

・

そんな顛末から十年後。

もう一度、最終刊が出た。

完結の物語。物語の完結。

表紙はぼろぼろになった万年筆の写真だった。

(後書き)

お題。『万年筆』です。

話は暗いですね。ダーク。救いも見えないお話です。

もうちょっと何とかなったんじゃないかとも、思いますが。でも、不幸にしか見えない状況も生きていつて『しまっ』こともできるという事です。

それは——書くことが出来れば生きていける少女のお話です。

お題ありがとうございます。

引き続きお題募集しています。

ただ、次回は友達から貰った『手羽元』です。

——てばもと？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0823k/>

例えば一本の筆があって

2011年10月6日18時16分発行